

スターレター・プロジェクト。それは少年・少女の「願い」を乗せただけの陳腐な計画だったはずだ。——けれど、その計画こそが全ての歪曲の始まりであった。

未那月刀剣術師範代並びにARRAMs代表・未那月美紀著『日常歪曲談』の冒頭より抜粋。

00

「これだよやく……」

神室夕星は、全能感に満たされていた。

指先を動かす度に「完成」に近づいていくソレの姿を前に、笑みを漏らしてしまうのも仕方のないことであろう。

五〇〇以上のパーツから成るヒト型の内部骨格と、全身を覆う強固な装甲群。

両腰には二丁の突撃機銃を備えながらも、全身が刃物のように研磨された姿は機械仕掛けの武者を思わせた。

翡翠色の相貌を備えた、そのマシンの名は、

「何を作ってるのよ、アンタはッ——！」

脳天を突き抜ける衝撃は浸っていた空想を悉く破壊して、夕星を現実へと引き戻す。

「うぐッ!？」

そのまま夕星は前のめりに転倒。そこに広がってあった工具諸々をばら撒きながらに額を打ちつけた。

ばら撒かれた工具は、プラスチック用片刃ニッパー（税込五二八〇円）、スポンジヤスリ六〇〇番から一二〇〇番（全て合わせて税込七一五円）

そして、夕星が丹精込めて作り上げたプラモデル。 百分の一 一／一〇〇（エクステンド）（税込一二

八〇〇円）だ。

「ッッ——！」

夕星は咄嗟に身を捻り、落下するエクステンドを受け止めた。床に衝突するまでの距離はわずかに数ミリ。

これはギリギリセーフといったところか。

アンテナや装甲の先端部など、折れやすい箇所が無事であることを確認した夕星は、振り返って、自らを背後から殴りつけたであろう人物を恨めしそうに睨んだ。

「痛っ……いきなり、何すんだよッ！」

「……」

そこに立つのは、ボブカットの少女だ。

丸っこい猫目をめいっばい細めた彼女は、夕星に負けじと睨み返してきた。

「いきなり何も、学校に来てまで玩具で遊んでる斗真が悪いに決まってるじゃない」

そう、ここは私立天川^{あまのがわ}高等学校・二年一組の教室であった。

やいのやいのと言いつつ二人の元にはクラスメイト達の視線を集めるが、それもほんの一瞬のこと。「またクラス一のバカと委員長が何か揉めてるんだ」と理解した全員が、見飽きた日常から視線を逸らす。

「玩具って……だから何度も言ってるだろ！ この〈エクステンド〉はただの玩具じゃないって！」

夕星の目の下にはマーカーペンで引いたような濃いクマがあった。これは寝る間も惜しんで〈エクステンド〉を制作していた故のものである。

キットを手に入れたから今日で三日だ。一分でも、一秒でも早く完成品が見たかった夕星は空き時間を見つけては、それが何処であろうとも制作を続けていた。

それだけの熱意と愛情を注ぎ込んだのだから、〈エクステンド〉は既にただの玩具に非ず。誠心誠意作り上げた一つの作品、或いは夕星自身の分身とさえも言えた。

けれど、そんな想いが他者に理解されるわけもなく。

「何言ってるの。こんなの、ただの玩具じゃない」

彼女には徹頭徹尾、正論で返されてしまった。

終いには「学級委員として、生徒指導に報告しなくちゃならない」と脅されたので、斗真は泣く泣く広げた工具を片付け始める。

「畜生……ヒバチは男のロマンってもんがわからねえからなあ……」

「聞こえてるわよ。あといい加減、ヒバチって呼ぶのやめてよね。小学校の頃の仇名で私のことを呼ぶのなんて、もうアンタくらいよ」

ヒバチ。——基い、藤森陽真里^{ふじもりひまり}は不服そうに眉根を寄せた。

二人の関係性を有体に言い表すのであれば、「腐れ縁」或いは「幼馴染」とするのが一番適切なであろう。けれども、その性格は鏡合わせのように違っていた。

首元が苦しいからという理由で制服のネクタイをダラリと緩めた夕星と、学校指定のブレザーを規定通りにキツチリと着こなす陽真里。二人の対称性は制服の着こなしの一つにも現れていた。

「けど、何というか意外よね。中学ではあんなに荒れてたアンタが、更生して、ここまでオタク趣味にのめり込むなんて」

「……んだよ、悪いかよ。今や日本の漫画やアニメーションは世界に誇れる文化なんだぜ」

「別に卑下する意図はないわよ。私だってゲーム好きだし、ソーシャルゲームのガチャで推しが出るか出ないかに一喜一憂してるくらいだもん。……けどね、夕星の場合は、のめり込み方が極端だって言ってるの！」

確かに夕星は、小さい頃から何かとハマりやすい方であった。中学の頃とはガラリと様変わりした自室のことを思い出す。

壁に貼ってあったグラビア写真はアニメのポスターに様変わりしたし、筋トレ器具は軒並み、漫画雑誌やライトノベルに置き換わった。

先月には遂にプラモデルやフィギュアを飾るためのショーウィンドウを購入する程だ。

「色々買ってるみたいだけど、お金、大丈夫なの？」

「うっ……！」

痛いところを突かれて言葉を詰まらせた。

一ヶ月分のバイト代を全て趣味に費やしたことが彼女にバレれば、やれ「貯金しろ」だの、やれ「もっと計画的に使え」だの、お説教を食らうことは目に見えているのだ。

「だいたい、この子は幾らぐらいしたの？」

陽真里は、片付けようとしたエクステンドをヒョイと摘み上げて、訝しそうに尋ねた。

「おい、ヒバチ！ そんな雑な持ち方すんなよ！ 下手に触って、壊れたら俺の三日間の努力が！」

「ヒバチじゃなくて陽真里だって言ってるでしょ！ けど、そうね……確かにすごく精密だし、ざっと三〇〇〇円ってところかしら？」

「えっ……いや、それは」

「五〇〇〇円とか？ それともまさか七〇〇〇円もするんじゃない?！」

税込一二八〇〇円だなんて口が裂けても言えるわけがない。

夕星の額には冷や汗が浮いて、次第に顔色も青くなってゆく。

「えっ、えっーと、半額セール品で五〇〇円くらいかなあ……あはは……」

「うん、アンタのその表情でだいたい分かったわ。多分、一〇〇〇〇円くらいしたのね」

当たらずしも遠からず。

呆れ返った陽真里は重苦しく嘆息を吐いた。

「私だって、アニメや漫画の中のロボットを手にとってみたいって気持ちは十分に分かる。ほんの一時でもフィクションにのめり込みたいって気持ちもね。だけどさ、このへエクステンドの場合——」

ほんの一瞬、校舎が揺れた。次いで、開け放たれた窓からは轟々とした風が吹き込んでくる。……はあ、また来たみたいね」

外を見れば何か巨大なシルエットが滑空し、校舎を飛び越えて行ったのだと理解できる。

けれど、クラスメイトの誰もがシルエットについて反応をする訳じゃない。まるで、それが彼らにとっての「日常」であるように。

高度を下げたシルエットは、やがて大通りへと足をつけた。全身の緩衝器を忙しくなく稼働させながらも着地しようとする一部始終は、夕星たちのいる教室からでも伺えた。

ヒト型の内部骨格と全身を覆う強化装甲群。

機械仕掛けの武者を思わせ、据えられた双眸を翡翠色に煌めかせた姿は、陽真里の手にしたプラモデルをそのまま大きくしたようであった。

いや、それは違う。

正確に言えば、あの巨大なマシンを元に一〇〇〇へエクステンドのプラモデルが作られ、販売されたのだ。

「だけどさ、へエクステンドの場合、」

陽真里は戦闘体制を取ろうとするマシンを見つめながらに、途切れていた言葉の続きを紡ぐ。

「——本物がすぐその現実にいる。ノンフィクションの産物じゃない」

01

頭部の装甲に「EXTEND/00」と印字されていたから、鉄の巨人はそのままへエクステンドと呼ばれるようになった。

正式名称・所属は共に不明。全長は三〇メートル前後、重量は五〇トン程度と推定。いつ、どこで、誰が、何の為に建造したのかも、正式な発表は未だ為されていない。

気まぐれに上空から飛来して、主に東京の天川市あまのがわに降り立つへエクステンドについて判明していることは、詰まるところ何もないのである。

けれど、「その巨人が何を為すか」だけは、この世界の誰もが知っていた——



空から降って来たへエクステンド。そして、向かいの空からも同スケールの何かが迫って来る。

へエクステンドと同じように大気を揺らし、同じように市街地に影を落としながらに。けれど、着地の仕方だけはまるっきり正反対であった。

へエクステンドが接地の瞬間に全身を折り、衝撃を殺したのに対して、あとから現れたソイツは自らの巨体を街に叩き続けたのだ。

ビルを薙ぎ倒しながらに粉塵を巻き上げる様は、自らの力を誇示しているようであった。そして、粉塵が晴れた先にソイツの姿が明らかとなっていく。

まず着目すべきは両腕に備えた巨大なハサミのシルエットである。次いで、真っ赤な甲殻が全身を覆っていることに気付かされた。

「———今月はザリガニの怪獣なんだな」

クラスの誰かが、そんな風に呟いた。

口に泡を蓄えながらに〈エクステンド〉を威嚇する姿なんて、小さい頃に池で捕まえたザリガニそのままだ。

〈エクステンド〉の明滅するカメラアイと、複眼が集合した故に黒い球体状を成したザリガニ怪獣の瞳が睨み合う。

実際には睨み合っていないのかもしれないが、少なくとも夕星にはそう見えたのだ。

「負けるなよ、〈エクステンド〉！」

あのハサミから繰り出される挟撃を掻い潜り、分厚い甲殻をどう打ち破るか？

その瞬間を見逃さないために、夕星は窓際へと駆け寄った。身を乗り出しながら興奮を隠しきれない自分の姿は、テレビの特撮番組に食い入る子供のようにも見えてしまうのだろう。

だが、そんな姿は陽真里を怒らせる要因になり得た。

「こらッ！ 何見入ってるのよ！」

またも夕星の頭には、彼女の鉄拳制裁が振り下ろされる。

「ツツ……痛ってえ！ こんにやろう、また叩きやがったな！」

「叩きもするわよ。休み時間にこっそりとプラモデルを作る程度ならまだ理解できるし、〈エクステンド〉が好きだって気持ちも尊重する。だけど、暴れ出すところを楽しそうに観戦するのは不謹慎でしょ！」

「暴れ出すって……〈エクステンド〉はいつも謎の怪獣から俺たちの街を守ってくれるじゃねえか。それに、あの辺はシエルターも多い地域だから被害だって少ないだろうし」

「言い訳しない！ 被害が多いとか、少ないとか、そういう問題じゃないでしょ！」

実際、陽真里の持つ価値観の方が正しく、模範的なのであろう。

だが、夕星たちの中では「巨大ロボット〈エクステンド〉と謎の怪獣が現れては殴り合いを繰り返す」という非現実的なフィクションが、半ば現実的なノンフィクションへと変わり始めていた。

およそ三年前。———初めて〈エクステンド〉と怪獣が現れ、街で乱闘を繰り広げた際には自衛隊の戦闘機が飛び出すは、世界中のメディアがこぞって夕星たちの町を訪れるはで、大パニックへと発展した。

けれど、「喉元過ぎれば何とやら」というのが人の性である。

この三年間で避難マニュアルが浸透し、避難用シエルターや耐怪獣建築の頑強なビル群が増えるに連れて、次第に〈エクステンド〉に抱く危機感を忘れていったのだ。

一か月に一度は怪獣が現れ、〈エクステンド〉が多少の苦戦をしながらも倒していくという

テンプレ通りのシナリオと、事態が起こる頻度も、危機感を喪失させる要因になり得たのだから。

おまけに〈エクステンド〉や怪物について、世界有数の研究チームがどれだけ調査を続けても、新たな事実が何一つ判明しないのだから、「あれは、ああいう概念なんだ」と受け入れ、適応することを多くの人々が強いられた。

その少し歪な現状は、夕星のクラスメイト達からも伺える。スピーカーから流れた放送の声通りに廊下に整列しながらも、「ラッキー。午後の授業が潰れる」程度にしか考えていない生徒が半分。

行きつけのショッピングモールや普段使っている駅が踏み潰されないか心配する生徒がもう半分。

そして夕星のような一部の生徒が、〈エクステンド〉がどのような奮闘を魅せてくれるかに期待している。

「それにさ不謹慎どうこうを言い出すのならなら、あの人はどうなんだよ？」

夕星は彼女をなるべく刺激しないよう注意しながらも、校庭の方を指差した。

そこに在るのは、拡声器を手にした女性教員の姿だ。

『——頑張れ〈エクステンド〉！ド派手なのをブチかましてやりなさいなッ！』

先程の夕星の姿がテレビの特撮番組に食い入る子供なら、ありったけの声援を届けようとする彼女の姿はさながらヒーローショーに盛り上がる司会のお姉さんのようであった。

見ようによっては夕星たち以上に不謹慎である。加えて彼女は今年で二十七なのだ。

そんな大人を、陽真里という生真面目な幼馴染が許すわけもない。両手を口元に添え、拡声器に負けないほどの大声を張る。

「何ふざけるんですか、未那月先生ッ！」

その声に養護教諭の、未那月美紀は「ビクン！」と肩を震わせた。

『あはは……そこに居るのは藤森委員長に神室くんではないか。放送にしたがって避難しなくてはダメだろうに！』

「今更、教師らしい振る舞いで誤魔化そうとしたって無駄ですからねッ！それに生徒の避難を促すのも貴女の仕事でしょう！」

『うぐっ……流石は謹厳実直な私の可愛い生徒だ。やはり小手先の口先三寸は通じぬか』

「とにかく早く戻って来て下さいッ！先生がクビになっても、私たちは知りませんからねッ！」

陽真里は溜息を今日一番の重苦しい溜息を吐き出した。

「うん……流石にあれば未那月先生が悪いし、ヒバチの気持ちも分かるかもな……」

夕星は自身のことを「まあまあの変わり者」だと認識しているし、お節介焼きの陽真里のことは「まあまあのお好き」だと思っている。

けれど、あの担任だけは「まあまあ」という言葉で収められる程度の変人ではなかった。昨年度から赴任してきた彼女が起こした問題は数知れず。愛車のシボレーカマロで校庭に突っ込むは、カツアゲされている生徒を助ける為に他校の不良をボコボコにするはで、一昔前の学園ドラマに出てくるヤンキー教師そのまんまである。

今日みたく拡声器を持ち出して〈エクステンド〉を応援するなんて奇行は可愛いもので、昨年度には廃部寸前だった演劇部と映像研を巻き込んで〈エクステンド〉を題材とした百二十分にも及ぶムービー映像を作成。それを何処かのコンクールに出した結果、最優秀賞を取ったらしいのだ。

けれど、そんな未那月先生の破天荒っぷりに魅せられてしまう生徒は多く。その美麗な容姿と相まって、特に男子生徒からは絶大な支持を得ているのが現状であった。

「けど、不思議だよな。PTAや教員委員会の目がやたらと厳しいこのご時世に、どうして未那月先生はお咎めなしなんだ？」

「そんなの私知りたいくらいだよ。理事長の孫娘だとか、実は学界でも指折りの天才だとか、色んな噂は飛び交ってるけど、どれも信憑性は定かじゃないし」

「ふーん……じゃあさ、〈エクステンド〉や怪獣を調査する為にやって来たどっかのエージェントだったたり！」

「バカ。だったら、どうしてそんなエージェントが何の変哲もない私たちの学校に潜入して、変人養護教諭のフリをしているのよ？」

陽真里の正論を受けて、夕星も我に帰ってきた。確かに、今の仮説は自分でも「ないな……」と思ってしまう。

そんなことを考えている間に、向こうでは〈エクステンド〉がザリガニ怪獣の触角をへし折っていた。

背面に備えられたブースターが蒼炎を吐き出して、振り上げられたハサミを回避。さらに流れるようなモーションで、鋼鉄の拳をねじ込んでみせる。

「あっ、」
きつと、それが決まり手になったのであろう。

頭を潰されたザリガニ怪獣は電池が切れたように動かなくなり、〈エクステンド〉もほんの数秒静止すると、空の彼方に飛び去ってしまった。

今回も自衛隊の調査チームが消えた〈エクステンド〉の行方を追うのだろうが、それも結局は徒労に終わってしまうのだろうか。

「今月はやけにあっさり勝ったな」
「五、六限も潰れねーじゃん」

なんて愚痴りながら廊下に出ていた生徒たちも教室へと戻って来た。

「はあ……あの〈エクステンド〉ってロボットは、どうして私たちの日常に現れたのかしら？」

そんな風に陽真里がうんざりするのも当然だった。

わざわざプラモデルを手に入れるほどのだから、当然夕星だって〈エクステンド〉の正体に関しては様々な仮説を立てた。

あの怪獣は地球侵略にやって来た宇宙人の尖兵で、〈エクステンド〉はそれに対抗すべく天才博士の作り上げた人類の叡智の結晶だとか。

遠い未来から人類滅亡を防ぐ為に送られて来たオーバーテクノロジーだとか。

果ては異世界や並行世界からやって来たのではとも考えたが、所詮はオタク少年の妄想の域を出ないのだ。

「別に何だって良いだろ。今回だって俺たちの街を護ってくれたんだし、カッコいいんだから、それで充分だ」

結局、謎は謎のまま。夕星にとっての凡庸な日常は、今日もまた過ぎてゆくのだった。

02

放課後。夕星はバスに揺られながら、隣町を目指していた。唯一の悪友から「遊びにいこうぜ」と誘いのメッセージが届いたのだ。

『集合場所はいつものゲーセンでいいよな?』

そこまでのLINEを打ち終えた夕星は、前の車窓へと視線を移す。

前方を進むのは迷彩色を纏うトラックだ。さらに前方にも同じような車両が数段並んで、ちよつとした渋滞を作っていた。

三年前、初めて〈エクステンド〉が怪獣を倒した際に、残された死骸をどうするかが問題となった。二〇メートルを裕に超える巨大生物の死骸を放置出来るわけがない。さらには各国の研究機関がこぞって怪獣の死骸を欲しがり、外交問題一步手前の大騒ぎへと発展した。

しかし、その問題は意外な形で解決を迎えることになる。倒された怪獣の死骸が、何の変哲もない砂塵になったのだから。

当時の研究者たちはこぞって度肝を抜かれたことであろう。

「怪獣を構成していた筋繊維や骨格が、何の変哲もない砂塵になる訳がない」というのが研究者たちの総意であったが、事実としてその現象が起こったのだから、彼らも口を噤むことしか出来なかった。

これも〈エクステンド〉や怪獣の正体が謎のままである要因の一つであるが、それでも街に残された砂塵は、誰かが回収して処理しなくてはならない。

「多分、連中の行き先も隣町なんだろうな」

あのトラックは街に降り積もった砂塵を、然るべき機関へと運ぶためのものだった。もっとも最近では回収した砂塵を保管するスペースが足りなくなっていて、海洋の埋め立てなんかに使っているという噂なのだ……

『悪い。ちょっと遅れるかもしれねえ』

そうLINEを打てば、スタンプ画像と共に「了解」という簡素な返信が届いた。

まあ、アイツのことだ。数十分くらいの時間は適当に潰すのであろう。

夕星はLINEを閉じて、各種SNSを開いた。そこで〈エクステンド〉と検索ワードを入れたのなら、昼間のザリガニ怪獣との奮闘を撮影した写真が山のようにヒットした。

中には、間近のローアングルで撮ったと思われるものや、機体各所のメンテナンスハッチや装甲同士の継ぎ目が見えるようなものまであった。

「やっぱり大きなメカは下から煽るように撮るのが、一番映えるよな♪」

いつもは「不謹慎!」とお説教をしてくる幼馴染様も、今日は委員総会らしく学校に残ったままだ。つまり、今の夕星を邪魔するものは誰もいない。

お気に入りの画像をダウンロードし終えた夕星は、ルンルン気分で鼻歌を奏でるのであった。特に気に入ったものはプリントアウトして、完成した一〇〇〇〈エクステンド〉のプラモデルと一緒に飾るのも良いだろう。

そんなことを考えている間にも、少しずつ渋滞の列が緩和し始めた。



迷彩トラック群は別ルートを使うようで、渋滞を抜け出たバスは間も無くして、駅前へと停車する。

そこから歩いて四、五分程度。夕星は行き付けのゲームセンターにたどり着いた。

自動ドアを潜れば、店内の忙しい喧騒が夕星の心を踊らせる。そして、ざっと店内を見和せば、一際目立つスペースに設置された筐体の前で、忙しくレバーとボタンを操作する男子生徒の姿を見つけた。

「おっ、やっぱりここにいたな」

夕星の羽織る学校指定の黒ジャケットとは真反対の白学ランは、進学校で知られる明王高

みょうおう

校のものだ。けれど夕星は物怖じすることもなく、彼のゲーム画面を覗き込む。

画面の中で派手なエフェクトと共に映し出されるのは、〈エクステンド〉と怪獣の姿だ。

これは〈エクステンド〉を題材にリリースされた格闘ゲームなのだから、画面に〈エクステンド〉や怪獣が映ること自体に不思議はない。が、プレイヤーを示すカーソルには違和感があった。

矢印が怪獣の方を指しているのだ。

しかも白学ランの生徒が次々にコマンドを打ち込めば、NPCが操作しているであろう〈エクステンド〉のHPGヒットポイントゲージがガリガリと削られてゆく。

「ああ、バカ! そんなことしたら、〈エクステンド〉が……」

夕星が発した悲痛な声も画面の中にまでは届かず、〈エクステンド〉が爆発のエフェクトと共に轟沈した。

画面にデカデカと表示されるのは「YOU WIN」の文字。それを見届けた白学ランの生徒が得意げな笑みを浮かべて振り返る。

「見たかい、夕星？ この華麗なスーパープレイを」

彼は鳥居十悟^{とりいじゅうご}。夕星の中学からの悪友であった。

オールバックに掻き上げられた髪と、猛禽のように鋭い瞳は相変わらず他者へ相応の威圧感を与えるものだ。けれども、十悟の浮かべる人懐っこい笑みは、それすらも帳消しにしてしまう。

寧ろ、爽やかなイケメンに見えてしまうのが若干ムカつくくらいだ。

「特に最後の決め技のコンボ。これを決めるために毎日一時間練習したのさ」

進学校の生徒が勉強や部活に精を出さず、放課後ゲーセンに通い詰めるのはどうかと思うが、十悟は昔からこういう奴なのだ。

自頭がいいからテストで困ったなんて、経験をしたこともないのだろう。

「あーもう、わかったから！」

ウザ絡みしてくる悪友を押し退けながら、夕星は向かいの筐体へと腰かけた。そして五〇〇円玉を挿入すると真っ先に〈エクステンド〉を操作キャラに設定し、対人モードを選択した。

「おっ、いきなりかい？」

「こっちは大好きな〈エクステンド〉が一方的にボコられるところを見せられたんだ。一人のオタクとして黙ってられっかよ」

「ああ、なるほど。けど、それはあまり賢い選択とは言えないな」

「んだよ……？」

「NPCが操作する推しが俺に負けるより、自分で操作した推しが俺に負ける方がショックも大きいだろうと思ってるさ」

十悟も操作キャラのカブトムシ怪獣を選択した。

投げ技を主体に設定されたカブトムシ怪獣は、遠中距離も対応したバランスタイプの〈エクステンド〉に対して不利となる。

きつと十悟なりの挑発なのだろう。

「上等だ。その喧嘩買ってやる！」

夕星の交友関係は限りなく狭く、その原因は中学時代に連んでいた不良仲間の殆どと縁を切ったせいであった。

縁を切った連中の中には、葉に手を出したというウワサがある奴や、少年院に入ったという奴までいるのだから、その選択に後悔はない。

けれど、十悟とだけは唯一、縁を切ろうと思えなかったのだ。

「ほらほら、ガードが甘いんじゃないかい？」

「クソ！ キャラ相性ならへエクステンド」の方が有利だったのに！」

十悟は中学の頃から、成績も運動神経もズバ抜けていた。

絶対に口に出すつもりはないが、そんな姿に憧れてしまうのも必然であっただろう。

「このツツ……!!」

そんな友人にゲームでくらい勝ちたいと思うのも、また必然であった。

画面の中のへエクステンドへはかなりダメージを食らったが、お陰で必殺技のゲージが溜まっていた。賭けに出るのなら一瞬だ。

「なあ、十悟……お前の学校でも教えてもらえないことを一つ教えてやるよ」

夕星は素早く筐体のレバーを弾き、必殺技と、そこから繋がるコンボのコマンドを挿入した。「勝負事は何だって、ビビったら負けなんだよツ！」

筐体のスピーカーが一際に大きな打撃音を吐き出して、カブトムシ怪獣が画面の向こうまで吹っ飛んだ。へエクステンドへの連撃からのアップパーカットが炸裂したのだ。

「よっしゃ！ 見たかよ、これがへエクステンド」の本気だ！」

「マジか……ははっ、これは手痛いねえ。けど、勝負は三ラウンド制、まだまだ喜ぶのは早いんじゃないか？」

十悟はほんの一瞬目を丸くするも、すぐに余裕を取り戻して見せた。

「フン、だったら速攻で二ラウンド目も取らせてもらうだけだ！」

大丈夫。次のラウンドも同じようにコンボを繋げれば、カブトムシ怪獣に大ダメージが与えられる。

夕星は勝機を確信していた。それでいて焦ってはいけないと、早まる気持ちを律してみせる。けれど、十悟は不意に思わぬことを聞いてきた。

「ところでさ。夕星はやっぱり幼馴染の陽真里ちゃん派かい？ それとも養護教諭の未那月先生派？」

生派？」

「ブツツ——?!」

全く予想外な角度からの質問に、夕星は嘖き出してしまった。

「なっ、何だよ、いきなり！」

「だから、君は陽真里ちゃんと未那月先生のどっちがタイプかを聞いてるんだよ。二人は天川高校の二大美人ってことで、以外と有名なんだよ。未那月先生に至ってはうちの高校にもファンクラブがあるほどさ」

昼間のように、普段から未那月先生の奇行を見せられている夕星からすれば、ファンクラブを作る連中の気が知れなかった。

それに気になるのは、寧ろ——

「ちなみに俺は陽真里ちゃん派かな。中学の頃は同じ生徒会の役員同士だったわけだし」

「はあ?!」

そういうええそうだったと思ひ出す。当時の十悟は不良であったにも関わらず、女子生徒からの多くの得票率を確立し、生徒会長の地位に登り詰めたことがあったのだ。

ちなみに陽真里は「十悟のアホを一人にしたら何をしでかすか分からん」との理由で、教師たちから半ば強制的に生徒会副会長の地位に押し上げられていた。

「ねえ、夕星。幼馴染の君が良いって言うのなら、俺様が陽真里ちゃんをデートに誘っても良いよな？」

「なっ、なんで、そこで俺の許可がいるんだよ！ 大体、わっかんねーな！ ヒバチみたいな口煩いだけの女のどが良いんだか？」

けれど、陽真里の横に十悟が並ぶ姿を想像して。それが何故だか、妙に面白くなかったのだ。「はい、隙あり！」

そんなことを考えていたからであろう。画面の中の〈エクステンド〉の動きが止まっていた。当然、そんなチャンスを十悟が見逃すわけもなく。二ラウンド目は彼にあっさりと奪われてしまうのだった。

画面に大きく表示される「YOU LOOSE」が尚のこと哀愁を際立たせる。

「十悟ッ！ 俺を動揺させようとワザと変な質問をしやがったなッ！」

「それは言い掛かりじゃないかな。プレイヤー同士の駆け引きも、ゲームの醍醐味のだろ？」向かいの筐体から顔を覗かせた十悟はニンマリとほくそ笑んでいた。

先程は人懐っこい笑みと評したが、訂正しよう。見る人間の（主に夕星の）神経を逆撫でする悪辣な笑顔だ。

「よし、わかった。テメエを絶対泣かしてやる」

そう決意した夕星が再び、力強く握ろうとした瞬間だ。

今日で『三度目』となろう轟音が空を裂いて、鼓膜の奥を震わせた。画面の外で、本物の〈エクステンド〉が再び、飛来したのだ。

03

〈エクステンド〉と怪獣が現れるのは一か月に一度だけ。だから、その空を裂くような轟音が響き渡るのも、両者が来訪する時だけで。本来は『三度目』の轟音など鳴り響くわけがなかった——



ゲームセンターから飛び出した、夕星はその圧倒的スケールを目撃することになった。

何本かの道路を跨いだ先に〈エクステンド〉が着地する。脚部装甲から露出した緩衝器が

サスペンション

伸縮。背中に集約した排熱口からは熱を帯びた白煙を吐き戻す。

インテーク

きつと飛翔時に機体内部へと籠ってしまった熱を、逃がしているのだろう。

「すげえ……すげえ！」

これほどまで間近で、〈エクステンド〉を見るのは初めてだ。

二五メートルを超えた鉄の巨人は辺りに暗い影を落とし、ローアングルから見上げることになった夕星は高揚を抑えきれなかった。

機体のパーツ一つ一つから細部の塗装剥げに至るまで、〈エクステンド〉の全てを脳裏に焼き付けようと、瞳を凝らす。

「夕星、何してるんだよ!？」

少し遅れて、十悟もゲームセンターから飛び出してきた。

「何って、〈エクステンド〉がこんなにすぐ傍で見れるんだぜ！ こんなチャンス滅多にねえだろ！」

「はあ……どうやら君は筋金入りの〈エクステンド〉オタクらしいね。けど考えてもみなよ、〈エクステンド〉が来たってことは、次は何が来るかを」

そう、〈エクステンド〉が飛来したからには、それと対峙する存在が現れるのが常だ。

向かいの空からは本日四度目となる轟音が迫り、〈エクステンド〉の正面に着地。相も変わらずビル群を薙ぎ倒しながら、粉塵を舞い上げるようにして現れた。

当然、二人の視線もその姿へと。粉塵が晴れて、次第に露へとなくなっていく怪獣の姿へと集約される。

だが、その怪獣には違和感があった。

「ちょっと待って……あの怪獣、何か変だ！」

十伍の言葉通り、その怪獣の様相は、これまで現れては〈エクステンド〉に倒されてきた他の有象無象たちとは何かが違う。

昼間現れたザリガニ怪獣のように、今日まで現れてきた怪獣たちは何らかの生物をそのまま巨大させたかのような存在であった。

対して、今現れた怪獣はどうであろうか？

シルエットこそアスリート然とした男性らしいものだった。

けれど、その全身はゴムのような質感の皮膚に覆われるだけで、甲殻や装飾らしいものは何もない。

のっぺりとした頭部には幾何学模様のラインが走るだけで、それは異質な不気味さを醸し出していた。

「うーん……たしかに得体の知れねえ野郎だが、〈エクステンド〉はあんなのに負けねえよ。いつもみたいに、こう、バーン！ って感じで勝つに決まってる！」

「そうだといんだけど……とにかく、あの二体にここまで近いのは危なすぎる。どこかのシエルターに身を隠さなきゃ」

十伍は急かすように、夕星のジャケット袖を引いた。

けれど、その判断はわずかに遅い。——向こうで〈エクステンド〉と得体の知れない怪獣が激しく掴み合いを始めたのだから。

互いの巨体が全力でぶつかり合った間には相応の衝撃が生じた。その余波は辺りの瓦礫や、乗り捨てられた車両を軽々と跳ね上げ、夕星たちの小さな体さえも弄ぶ。

「やべっ!」

二人の小さな体は衝撃によって、宙へと舞い上げられてしまったのだ。

夕星は咄嗟に額を庇うも、すぐに重力に引かれて、間近にはアスファルトが迫ってきた。

次いで自分を襲うのは衝撃と鈍痛だ。こんな痛みを味わったのは、中学の頃、親のバイクを無断で借りた拳句にノーヘルノー免で転倒させたとき以来であろうか？

「ツツ……痛ってえな」

それでも切れた額の血を拭い、砂埃の向こうで十悟の姿を探す。

「おい……十悟ッ! 大丈夫か!」

「ギリギリ! 運がよかったみたいだね」

その白い学ランには汚れ一つない。きつと、あの土壇場で華麗に受け身を取ったのであろう。自分が思い切り頭を打ちつけたというのに、この悪友は本当になんというか……

「下手に動き回るのは危険だ」と、無言で顔を見合わせて、夕星たちはその認識を共有する。

周囲に落下の恐れがある看板や、千切れる恐れのある電線がないことを確認した二人は手頃な建物の物陰へと身を滑り込ませた。

「悪いけど夕星……俺はしばらく〈エクステンド〉のことも嫌いなりそうだよ」

「ははっ。なら、掌を返す準備をしておくんだな。〈エクステンド〉がああ怪獣をブチのめす瞬間に備えて」

嵐が過ぎ去るのをじっと待つように、二人はこのまま事態の収束までやり過ぎつもりだった。

だが、それは〈エクステンド〉が怪獣に勝利すると言う前提の防衛策でもあった。現に夕星は、〈エクステンド〉の勝利に何の疑いも持っていない。

これまでの日常がそうであったのだから——

不意に向こうで怪獣が構えを取った。上腕で腰から上をガードし、小刻みなステップを踏むために爪先を上げたのだ。その立ち姿はまさしく、

「ボクシング!」

怪獣の振る舞いがボクサー然としたものになる。

何もない剥ぎ出しの拳にはグローブが嵌められているじゃないかと錯覚する程に、その振る舞いは胴に入ったものでもあった。

「けど、なんで?」夕星たちがそんな疑問を口にするよりも早く、怪獣はショートジャブの

連打を繰り返す。

「野郎ッ……けど残念だったな！ 〈エクステンド〉の全身を覆う装甲は単純な打撃程度、効きやしねえんだよ！」

現に夕星の言葉通り、〈エクステンド〉は拳の雨に晒されながらも、腰を落としながらにカウンターの狙っていた。

「いけえ、〈エクステンド〉！ ラッシュが途切れた瞬間がチャンスだ！」

「いや……ちょっと待つんだ夕星……」

一発目の拳を打ち込んだ時点で、あの怪獣も〈エクステンド〉の頑強さや打撃の危機の悪さに気づくチャンスはあったはずだ。

それでも尚、拳を撃ち続けるのは、あの怪獣がボクシングしか出来ないからなのか？

「あの怪獣は他の怪獣とは何かが違う……俺にはアイツが何かを狙っているように思えてならないんだよ」

そんな十伍の予感が、次の瞬間に的中した。怪獣がまた構えを変えたのだ。〈エクステンド〉が渾身のカウンターを放つために無防備にならざるを得ないその一瞬を狙って。

ボクシングの構えがスピードと連撃をウリにしているのなら、その構えは先ほどと真逆。足裏を地面にベタで接し、腰の捻りから繰り出されたその張り手は中国拳法で言う「発勁」である。

「なっ……!?!」

〈エクステンド〉の腹部を覆う装甲が、火花と共に剥離する。

まるでガラス細工を砕くように。機体を支えるフレームが断裂、引きちぎれたコードや機体を巡る液状燃費がまるで臓物の用に飛び散った。

脇腹を抉られた〈エクステンド〉が膝を着こうと、怪獣の勢いは止まらない。寧ろこの千載一遇のチャンスに、その本能が昂るのであろう。

もう一撃、打ち出された発勁は〈エクステンド〉の頭部を精密に捉えていた。

その衝撃に弾かれた頭部は空中に山なりの弧を描き、やがて夕星たちのすぐ側へと降ってきた。

「危ないッ！」

咄嗟に十悟に腕を引かれる。今、彼が腕を引いてくれなければ、透馬は飛んできた〈エクステンド〉の生首の下敷きになっていただろう。

「……………う、嘘だよな」

落下したそれは最早、頭部とわからぬ程に大破していた。装甲板が怪獣の掌型に凹み、翡翠色をしたカメラアイは数度明滅するも、そのまま彩度を失ってしまふ。

今、この瞬間。数多の怪獣を倒し続けてきた〈エクステンド〉が、初めて怪獣に敗北したのだ。

「誰かが怪獣をデザインしているのではないか？」という説が持ち上がったことがある。今から三年前、〈エクステンド〉と共に初めて現れた怪獣はトカゲをそのままスケールアップしたような個体ながらも、その体格は二〇メートル前後と、最近の怪獣と比較して一回り小さな姿をしていた。

だが、その次に現れた怪獣は二メートル前後とやや巨大化し、二二、二三とその身体を大きくしていった。

そして、カブトムシ怪獣が現れた時期を皮切りに、怪獣は強固な甲殻を纏うようになり、〈エクステンド〉の装甲にも劣らない強固な防御力を獲得したのだ。

怪獣を倒すと、次はもっと強い怪獣が現れる。だから、そこに何らかの意思があるのではないか？ と考察する層が出るのも解る。けれど、この説も所詮はネット上で盛り上がった仮説に過ぎず、その信憑性もオカルト的な考察や、誰かの陰謀論程度のものであった。

結局謎は謎のまま。

一ヶ月に一度、現れた怪獣を〈エクステンド〉が倒していく。そんな日常が今日も過ぎゆく筈であった。

だが、誰かが本当に怪獣をデザインしているのなら。そのデザイナーはこう考えたのではないだろうか？

重い甲殻を纏ったところで、結局〈エクステンド〉に砕かれてしまうのならば。いっそ、ウایتを脱ぎ捨ててより「闘う」ことに特化した怪獣を想像するのはどうかと。

そんな願望の果てに産まれた怪獣が、あの得体の知れない怪獣だったとしたら――



夕星^{ゆうせい}は目の前の現実^{げんじつ}に絶句する。その視線の先にあるのは、ただの鉄屑と化した〈エクステンド〉の残骸であった。

ひしゃげた装甲の隙間から滴るオイルはドス黒い血液のようで、それは壊れた機械というよりも、死に絶えた生物を思わせるグロテスクさを内包する。

「……………」
その鉄屑に手を伸ばすも、〈エクステンド〉は夕星の指先が触れた途端、きめ細やかな砂塵と化して崩れてゆく。

残されるのは、山形になった砂だけだ。
そして、頭部と同調するように、向こうで残された首から下のボディもまた砂塵となって消えてしまう。

「な……なんで」
夕星の理解は追いつかなかった。

倒された怪獣の死骸が砂塵となって崩れていくのは、原理が解らなくとも納得できる。きつと怪獣だけが持つ「未知の体組織がどうたら、こうたら、」でと頭の中でそれらしい仮説を立てられるからだ。

だが、「エクステンド」は明らかな人工物だ。最先端のテクノロジーの集合体とも言える人型マシンがどうして怪獣と同じように砂塵と化して消えてしまうのか？

そもそも夕星には、「エクステンド」が怪獣に敗北した」という事実自体を受け入れられずにいた。

足元の砂塵を掴むも、それは夕星の指先からサラサラと滑り落ちてゆく。

それはまるで、自分の中にあった「エクステンド」への好感や信頼が喪失するようでもあった。

「おい、夕星！ しっかりするんだ！」

十悟じゅごが激しく肩を揺さぶった。それで、夕星もようやくと我に帰る。

「悪いが、今はショックに暮れてる場合でもなさそうだ……見なよ、アイツの方を」

「エクステンド」を倒したあの怪獣は、次なる標的を目の前に聳えるビルへと移したらしい。

腰を入れて踏み込むようにして放つは、空手の「突き」であった。

ボクシングや中国武術のみならず、日本の空手まで会得しているとは。ビルの窓には亀裂が走り、拳との衝突部に生じたクレーターからへし折れてゆく。

「俺たちは想像しなくちゃいけないのかもな……「エクステンド」が負けた後のことを」

そうだ。

夕星はイメージする。これまで勝ち続けてきた「エクステンド」が負けてしまったあとの日常がどうなるかを？

あの怪獣は破壊の限りを尽くすのであろうか。それともどこかの誰かがミサイルや戦闘機であの怪獣を撃ち倒してくれるのか。

どう思考を巡らせたって、夕星のイメージが辿り着くのは廃墟となった街と、犠牲となった人々の山であった。

今更ながらに陽真里ひまりの警告を思い出す。「エクステンド」と怪獣の闘いを楽しむのは不謹慎である」と。

きつと自分は幼稚で、彼女は真っ当だったのであろう。そんな時、不意に怪獣が動きを止めた。両腕をダラリと下げたまま沈黙する。

もしかしたら街を壊すのに飽きて、このまま空に帰ってくれるのでは、と淡い希望を抱くのも束の間であった。

怪獣の顔が横に裂け始めたのだ。そこから覗くのは鋭利な牙と、テラテラと粘液質な輝きを放つ舌。

「フッ……フッ……」

怪獣が口を開けたのだ。そして、音を詰まらせながらも何か言葉を紡ごうとする。

「フジッ……フジッ……モリ」

口が縦へ、横へと形を変えて。

「フジモリッ……ヒッ……ヒマリ……」

フジモリヒマリ。——そのワードは夕星の中ですぐさま「藤森陽真里」の名へと変換される。

「アイツ、今陽真里ちゃんの名前を呼んだよな？ けど、どうして……って夕星!？」

今度は思考を巡らせるよりも速く、身体が動いていた。

それはほとんど条件反射のように。夕星は弾かれた弾丸の如く、走り出す。

「ッッ!!」

だが、虚しいかな。沈黙した怪獣が再び歩き出せば、その振動で足元が揺れ、夕星は派手に転ばされた。

怪獣そのまま、向こうへと。夕星たちの通う天川高校あまのがわへと進路をとった。

たしか陽真里は、委員総会で今頃も学校に残っている筈だ。だとしたら、あの怪獣は何らかの器官を用いて陽真里の居場所を補足しているのではないだろうか。

直観はほとんど確信へと変わった。

「クソッ……十悟、この辺りに駐輪場はないのか！ このまま走っても、野郎にはとてもじゃねえが追いつけない！」

「いや、何言ってるんだ!？」

「だから駐輪場はなかったか聞いているんだよ！ 緊急時なんだ、前科が付くのも構うもんか。とにかく自転車でもバイクでも盗めるもんを盗んでヒバチを助けに行くんだッ！」

「夕星、少しは頭を冷やすんだ……仮に都合よく自転車やバイクを盗めたって、それであるの巨体の歩行速度に追いつけと思うか？」

「それでもッ！ あの怪獣はハッキリとヒバチの名前を呼んだんだ！ それに何でかアイツの居場所もバレてるんだぞ！」

既に夕星の頭の中を埋めるのは、藤森陽真里のことだけだ。彼女を助けに行かなければ。——そんな想いだけが先走る。

「じゃあ、夕星。俺もハッキリ言わせて貰うが、君が陽真里ちゃんの元に駆けつけたとして、それが何になるんだよッ！ どうにもならないことくらい少し考えれば解るだろうがッ！」

十悟のぶつけたてきたそれは、どうしようもないくらい正しい正論である。

相手は鉄の巨人も、無数のビル群をも容易く壊してみせる怪獣。

対する自分は中学の頃に多少荒れていた程度で、ミーハーなオタク趣味を持つだけの高校生

だ。

スケールも何もかもが違いすぎる。

「それとも、君には何かあの怪獣を倒す作戦があるってのか？」

「そ、それは……」

そんな作戦が思いつけるのであれば、既に行動に移している。何も思いつけないからこそ、こうやって言葉に詰まっているのだ。

「もしも、あの怪獣を倒せるだけの力が自分にあったなら」と、そんな願いが頭の片隅をよぎった。

「あの怪獣の脅威から陽真里を守れるのなら、自分はもうなっている」と、そんな願いを胸のうちで強く抱きしめる。

——けれど、「願いたい」とは所詮「願いたい」に過ぎない。

「畜生ッ！」

夕星は募る苛立ちを吐き捨てようとして、ふと自分の足元に少量の砂塵が付着していることに気づかされた。

〈エクステンド〉を形作っていた、あの砂塵だ。

初めは転んだ拍子にくっついて来たのかと思った。だが、それも違うということにすぐに気がされる。

無数の砂塵は夕星の足元を伝い、気づけばずっと背負ったままになっていた鞆へと集まっていく。

「おい、夕星……それって」

十悟も異変に気付いたようだ。そして次の瞬間には、鞆から何か飛び出していた。

鞆へと集まっていた砂塵も、宙へと飛び出したそれに続く。

さらに向こうの路地からは〈エクステンド〉の首から下を形作っていたであろう砂塵の波が押し寄せて、それを中核に何かを形作っていった。

夕星には、その正体がすぐにわかった。砂塵の中核は、自分が寝る間も惜しんで作り上げ

た^{百分の一}／一〇〇スケールのプラモデルであると。

やがて、寄り集まった砂塵はヒト型の内部骨格と、全身を覆う強固な装甲群を完成させる。

両腰には二丁の突撃機銃を備えながらも、全身が刃物のように研磨された姿は機械仕掛けの武者を思わせた。

翡翠色の相貌を備えた、そのマシンの名は、

〈エクステンド〉

夕星の声に応えるよう、鉄の巨人は今再び地面に立ち上がる。

夕星のプラモデルを中核に再構成された〈エクステンド〉には傷一つない。金属的な鈍い輝きを放つ全身の装甲は、それが砂塵で出来ていると思えない程であった。

ただ一つ、先程まで怪獣と戦っていた〈エクステンド〉と今の〈エクステンド〉の差異を上げるのならば、額に印字されたナンバーが「00」から「01」に変わっていることだ。

「嘘だろ……〈エクステンド〉が蘇ったのか……」

十悟はその光景に、理解が追いつかないという顔で絶句する。

理解が追いついていないのは夕星も同様であった。ただ、それと同時に妙な納得感もあった。まるで、こうなることが予め決められた確定事項のような気がしてならないのだ。

それどころか、殆ど直観的にとある考えに辿り着く。——「今の自分なら、このマシンを操れるのではないか？」と

そんな考えと同時だった。〈エクステンド〉の巨体が跪き、その剛腕を夕星へと差し出した。金属の噛み合う音と共に、カメラアイやセンサー類を保護しているであろう装甲が展開。まるで大きく口を開けるようにして、その内側が露わとした。

「まさか、お前……」

そこにあるのは、ちょうど人が一人収まりそうなシートと、一对の操縦桿らしきモジュールが備えられている。

空の操縦席を露出した〈エクステンド〉はただ鎮座して、己が乗り手をただ待ち侘びる。

「……俺に『乗れ』って言いたいのか？」

上等だ。

夕星は奇跡や神様なんてものを信じるタチじゃない。なんなら少し斜に構えて「そんなの信じねーぜ」と笑い飛ばすタイプだ。

ただ、今は奇跡だろうと何だろうと構いやしない。「力が欲しい」と願い、その結果与えられた力が〈エクステンド〉だというのなら、躊躇う理由もなかった。

「待つんだ、夕星……」

差し出された 掌 マニピュレーター へと飛び乗ろうとする夕星の腕を、十悟が掴む。

「まさかとは思って聞くが、夕星……君は、コイツに乗ろうって気じゃないよな？」

「そのまさかだ。俺は〈エクステンド〉であの得体の知れねえ怪獣をぶっ倒して、ヒバチを助ける」

「いや、何言ってるんだよ……〈エクステンド〉はさっき、あの怪獣に負けたばっかじゃないか！ それに陽真里ちゃんだって馬鹿じゃない。仮に学校に残っていたとしても、あの怪獣が

迫って来るのを知れば、すぐに避難するはずだろ！」

例え、困惑の中にあろうとも、十悟の主張は最後まで正論であった。

夕星の周りの「頭のいい奴」は揃いも揃って、正論が上手い。それはきっと自分以上に周りが見えているからであろう。

だが、今回ばかりは夕星も譲る気がなかった。

陽真里を狙う、あの怪物はこれまでの怪物と何もかもが違っているのだ。

もしも、彼女がシェルターに隠れたとして。あの怪物がシェルターごと彼女を潰せる術を持つていたらどうなる？

もしも、何らかの要因で彼女が逃げ遅れていたらどうなる？ きっとあの怪物は避けた口元をニンマリと歪め、嗤うのだろう。

「悪いな十悟。俺はヒバチが……いや、陽真里が傷付く可能性があるのなら、例えそれが一パーセントにも満たない確率であろうとも、それを許すことができないんだ」

「なんだよ、それ……。確かに俺だって陽真里ちゃんのこととは心配だ。幼馴染である君が、彼女に対して特別な感情を持つてることだって知っている。ただ、さっきから聞いてれば、陽真里ちゃん、陽真里ちゃんって……少し熱くなり過ぎだ！」

十悟の瞳がキツク眇められた。

けれど、その瞳に込められた思いは、敵意や苛立ちではなく、自分へと向けられた不安と心配であった。

彼は此方の襟首を掴み上げ、強く揺する。まるでどこかおかしくなってしまった自分を正気へと戻そうとしているようでもある。

だが、夕星はその腕を払い除けた。

「悪い、十悟。俺にとって陽真里はただの幼馴染じゃねえんだ。——増して、『好き』とか『嫌い』とか、そんなチープな言葉で表せるほど、俺の内心は安くねえんだよ」



中学に上がって間もない頃、夕星の父親が蒸発した。職場で女を作り、そのまま相手共々、行方が掴めなくなったのだ。

あの男は子供だった夕星から見ても、世渡りが上手い方であった。様々な人間関係を構築し、それを効率よく利用する手腕は、半ば詐欺師じみていたとも思う。

そんな男なのだから、今も呑気に日常を過ごしているはずだ。或いはその女と幸せな家系でも築いて、自分のことなんかとつくの昔に忘れていないだろうか？

それからまた暫くして。今度は次第に頭がおかしくなりつつあった母親が遂に首を括った。机上に「ごめんね、夕星」とメモを残してだ。

正直、何が悪かったかと思ってしまう。

謝るくらいなら、もっと別な選択があったのではないかと、親を失った悲しみよりも、苛立

ちが上回った程だ。

幸いにも母方の両親が夕星を引き取ってくれたから、経済的にも生活的にも困ることは少なかった。それでも、多感な時期にそんな経験をしたのだから、夕星の中学時代はひどく荒れ果てた。

手当たり次第に、詰まらないことをしている連中を殴り倒して、憂き晴らしに勤めていた。いかにもガラの悪そうな高校生や、地元の愚連隊と正面を切って喧嘩をしたのだった。一度や二度じゃない。

当然、そんな日々を送っていたら、絆創膏や生傷と共に、自分へ向けられる冷やかな視線と偏見ばかりが増えていく。いや……あれは偏見などではなく、他者の認識する「神室夕星」という人物像そのものであったのであろう。

腹を割って話せる友人も、十悟くらいのもので。他の悪友も媚へずらってくる金魚のフンばかりであった。

けれど、当時の自分はそれで良かったのだ。いっそ一人になれたなら、どれだけしがらみがなくなるだろうかと、心地の良いメランコリーに酔ってさえいた。

だが、彼女だけは——藤森陽真里^{よじもり}だけは、自分にしつこく付き纏うことを止めようとしなかった。

例え何度拒絶しようとも、「幼馴染だから！」という理由だけで、彼女は救急箱を片手に傷の手当てをしてくれたのだ。

ロクに授業に出ようとしなかった自分に、勉強を教えてくださいました。未来や進路について論じられたのだから、一度や二度ではない。

「夕星はもう少し、他愛もないような日常を好きになった方が良いよ」と。

「世界はフィクションとノンフィクションに溢れてるんだから。辛いなら、存分にフィクションに逃げて良い。子供みたいに幼稚な願い事や幻想を抱いたら、目の前のノンフィクションに押しつぶされるよりはマシなんだから」と。

そんな風なお説教を、何度も食らったことを覚えている。

そして、また少しずつ時間が過ぎていって。中学を卒業するくらいの頃には、喧嘩の傷が顔から綺麗に消えていた。

どこで道を間違えたのか、オタク趣味に目覚め、お金の使い道について叱られることも増えたが、それで良かったと思う。

少なくとも今の自分は中学の頃の自分とは違う。

彼女の言う通り、他愛もない、何処にでもあるような日常を心の底から楽しむことができたのだから。



「きつと俺は陽真里がいなくちゃ、親父以上のろくでなしか、お袋以上の無責任な大人になってたと思うんだ。だから、寸でのところで俺を引き止めてくれたアイツには、返しきれないくらい之恩があるんだ」

だから、彼女を助ける。

「泥沼の底にいた自分を彼女が救ってくれたように、今度は自分が彼女を救わなければならない」と言う、ただそれだけのシンプルな理由が、夕星の手足を動かす原動力となり得た。

トルクを上げるエンジンのように火照ってゆく気持ちも、鋼のように固い覚悟もすべては彼女がいるからだ。

「そうかい……陽真里ちゃんが君に求めている想いは、そんな呪縛みたいな恩義じゃなくて、もっと単純明快なものだと思うけどね」

夕星には、そこに込められた真意を読み解くことが出来なかった。

ただ、十悟もこれ以上、自分を止めようとしな。その代わり、握った拳を差し出して、

「分かった、君の好きにすれば良いさ。〈エクステンド〉に乗って、あの怪獣を殴り倒すのも、陽真里ちゃんを助けるのも、好きにすれば良い。——ただ、一つ条件を付けさせてくれ」

「条件？」

「ちゃんと、勝って戻ってくるんだ。そうしたら、また放課後ゲーセンで遊ぼう。格ゲーの決着ついてないだろ？」

そういえば、お互い一ラウンドを取ったまま決着がついていなかった。

それを言うのは今じゃないだろうに、本当にこの悪友は……

「十伍、お前な……」

ただ、おかげで張り詰めていた気持ちも解れた。

「ああ、分かっている。俺の操る〈エクステンド〉が怪獣なんかには負けるわけがねーだろ！」

夕星も同じようにして拳を差し出す。

そこで交わしたフィスト・バンプからは、小気味の良い音が鳴った。



ゆっくりと装甲が降りてきて、夕星を収めたコックピットは静かに閉ざされる。

ほんの一瞬視界が暗闇に包まれるも、すぐにシート背部から顔の半分を覆うようなヘッドセットが現れ、額へと装着された。

これを介して、外の光景を窺い知るのであろう。

「ロボットのものでよくある網膜投影とか、視神経のリンクみたいな奴なんだろうな」

夕星の視界に映し出されるのは、外の景色だけじゃない。機体の電圧や油圧など、様々な数値を示すパラメータが投影された。

複雑な数値の羅列ばかりが視界を埋め尽くしていく。

だが、夕星には何故かその意味が理解できるのだ。
操縦桿をどのように倒して、足元の踏板をどう蹴れば、機体がどのような挙動をするかまで理解できる。

それどころか、すこし懐かしい感じまで……

「電圧チェック。油圧チェック。」

コックピットに備えられたスイッチを一つ、また一つと入れていく。

その動作に一切の逡巡はない。

「エンジン回転数・正常。ノーマル 関節機構ロック解除。 オペレーティングシステム O S アクティベイト・スタンバイ。

—— さあ、いこうぜ（エクステンド）ッ！」

06

ヘッドセットを通して見える景色が一瞬で流れていく。それだけ（エクステンド）は早いのだ。その鉄脚でアスファルトを踏み締め、背部のスラスタは流星のような尾を描く。

きつと、普段の夕星^{ゆうせい}